

分科会

第1分科会「住まい・暮らし」

参加者数（有料）36人

森と木でつむぐ都会の暮らし

安全や安心が確保され、健康で快適な暮らしを実現するためには、森林の恵みである木材を暮らしの中で上手に利用することが大切です。このために供給者側に求められることは、健全な森づくりを続ける山の木を、ニーズに応じた多様な商品として消費者に届けることと考えます。

分科会では、視点の異なるNPO等の活動事例を学ぶとともに、それらが相互につながることの意義や可能性について議論を深めます。

発表者

井上 淳治 さん ● きまま工房・木楽里 代表、NPO法人西川森の市場 代表理事

【きまま工房・木楽里】埼玉県飯能特産の西川材を使って、身の回りの小物から椅子やテーブルなどの家具類まで木製品を自分で作ることのできる工房。木の良さを知ってもらい、生活の中で森を感じてもらいたい。

【西川・森の市場】森林所有者、素材生産業者、製材、設計、大工・工務店が集まって作った木の家の相談窓口。地域材である西川材の調達から住宅の設計、施工に至るまで顔の見える関係で家づくりをサポートする。

能口 秀一 さん ● NPO法人サウンドウッズ 木材コーディネーター

NPOサウンドウッズは、兵庫県と京都府にまたがる中山間地「丹波」を拠点に、森とくらしを心地よくつなぐ活動を展開している。「木材コーディネーター」は森から消費者まで、ものづくりとその過程をまとめ、地域の森を活かすためのしくみやデザインを仕掛けるプロフェッショナル。NPOサウンドウッズは「木材コーディネーター」の養成講座を運営している。

若杉 浩一 さん ● 日本全国スギダラケ倶楽部、パワープレイス株式会社 シニアディレクター、リレーションデザインセンター インタラクションデザイン部 部長

1984年九州芸術工科大学芸術工学部工業設計学科卒、同年株式会社内田洋行入社。製品開発と研究開発を担当し、現在、内田洋行のデザイン会社であるパワープレイスにて、ITとデザインのメンバーを集めて「リレーションデザインセンター」設立、事業化を志す。企業の枠やジャンルの枠にこだわらない活動を行い、企業と個人、社会の接点を模索している。2004年、スチール家具メーカー勤務ながら、「日本全国スギダラケクラブ」を南雲勝志氏と設立。

コーディネーター

丹羽 健司 さん ● 矢作川水系森林ボランティア協議会（愛知県）代表 NPO法人地域再生機構（岐阜県）木の駅アドバイザー

地元山主さんと協働でつくる「間伐モデル林事業」、流域の人工林を科学で調べ五感で感じる「森の健康診断事業」や「森の健康診断全国出前事業」、間伐材と地域通貨で山村を元気にする「木の駅プロジェクト」を立ち上げ、山村の森作りを支援、また、DIYキット組手仕による木育・木装事業なども行っている。

● 報告執筆

高木 健郎

(一橋大学大学院経済学研究科修士課程、JUON(樹恩)NETWORK ボランティア)

1. 事例報告

■ 井上 淳治さん

埼玉県飯能市で森林所有者として林業に関わっている井上さんからは、「人と森林、生活と木」というテーマで、森を育てる、木を伐る、使うという3点で活動されている話をうかがいました。

その3点すべてを進めるために、多くの人に知つてもらう事業として、体験型工房「木楽里」を運営しています。お客様に時計、机、ラックなどを実際に作ってもらい、井上さん自身も「黒いスギ」の価値に気づいたことや、木目の詰まつたいい木材は共通して評価されることなど、新しい発見があるということでした。

また、地域に入り、天然乾燥材利用のためのストックヤード、地域材を使った住宅建築のための相談窓口となるNPO「西川森の市場」の代表理事をされています。

こうした活動を通じて、将来的には、機械化を進めると同時に、廃棄までを考えた山に再投資できる価格設定を実現し、後継者も集まり育成できる環境を目指されているということでした。

■ 若杉 浩一さん

企業でプロダクトデザイナーをなさっている若杉さんは、日本全国スギダラケクラブを通じた活動をご紹介いただきました。スギを通じた共感という軸から、行政・企業・市民・子どもたちまで巻き込み、店舗・JR九州の電車から宮崎空港の手荷物検査場までスギを取り入れてしまうというダイナミズムをお伝えいただきました。

企業がお金のあるところしか向かわないという地域も疲弊する経済の仕組みを変え、地域と本気で結びつき、人と付き合う面倒さを乗り越え、喜び

を広げることで、それがみんなの利益となり、経済となるということを伝えていただきました。さらに、企業にも、デザインやマーケティングといった資源を通じて、地域の文化、環境といった物語を伝えることができると語っていました。

■ 能口 秀一さん

木材コーディネーターである能口さんは、兵庫県を中心にNPO法人サウンドウッズを通じて、森林所有者と、中間生産業者、消費者をつなぐ活動を続けています。背景を理解した上で価値を落とさずに売ったり、またどう使われたかを森林経営にフィードバックし、計画に活かすということに取り組まれています。また、長期の山林経営を見据え、木材コーディネーターの後継者育成にも取り組まれているということでした。

他方、現場実践の観点から、地域の製材所を通じて多様な主体をつなげ、自発的な意思決定を促すことで、地域の森づくりをサポートしています。

2. コーディネーター

■ 丹羽 健司さん

パネルディスカッションでは、丹羽さんの「多様な主体が関わる中、最終的に、えいや！ とどう決めるのか？」とう話題提供を中心に展開しました。それぞれ、考えなくてもいいと言われてきたことに皆もやもやとしたものを持っていて、我々が解決できるところから動くことで社会が動いていくという発言や、各々の主体のレベルでまず聞き、理解していくことで、結論がつかめるようになるという意見をいただきました。

加えて、個々人の信頼関係の重要性の指摘や一方で先入観があると難しいので、子どもの頃からの教育も必要ではないかという意見もありました。

分科会の最後には、コーディネーターの丹羽さんから、現在の林業の現状では新しい主体を加えていく必要があること、またそうした人を含めて、

分科会

第1分科会「住まい・暮らし」



地域の自発的な合意で、後からビジネスがついてくるような構造を作っていくことが大事ではないかというコメントがありました。

3. 参加者の発言（質疑応答）

「地域の中でビジネスとして動いていくにはどうすればいいですか？（愛知県、男性）」

報告者の方々から、まず、心の底から楽しいと思えることをやり、人を巻き込んでいくべき、という発言がありました。

「国産材利用を量的に増やすべきではないでしょうか？（兵庫県、男性）」

これに対しては、インフィル（集合住宅の建物で、基本構造以外の各戸の間取り・内装・設備など）といった家具でも建材でもない中間的な需要を作り出す取り組みの紹介や、発電需要で木材利用は広がるが、良質材がそこに奪われないようにすべきという発言がありました。

「親の実家に森林があり実態を知らないため、将来的に不在地主になってしまいそうだが、どうしたらいでしよう？（東京都、女性）」

これについては、森林にどういう価値があるかなどの情報を調査して、所有者の立場で伝えるサービスがこれからは必要になるのではないか、という発言がありました。

4. 執筆者の感想

共通していたのは木材の消費者と生産者をどう結ぶか、ということだったように思います。いままでは金銭的な効率性を中心とした経済によって、その関係が希薄になっていて、同時に日本の林業は衰退していました。しかし、報告者の方々はそこにきちんとした物語（その木材の背景、地域の文化、環境など）があれば、高くて伝わる、林業を維持できる価格水準でも理解されると話していました。その際、誰が間に入していくか、どれだけの人を巻き込めるか、が重要になってくるとも感じました。

この分科会の報告者、コーディネーターは、まさにその間に入る役割をしている方々で、違った立場から同じことに取り組まれていることは比較して興味深かったです。こうした仲介ができる人が増え、多様な主体が強みを持ちより、自発的に合意形成できるようになれば、林業も、地域も活性化し、人も喜び、次世代に価値がつながるような状況が生まれるのではないかと、期待を抱きました。

全体として、報告者のみなさんが、第一線で森林の大しさ、楽しさを抜げて行っているという話は非常におもしろかったですし、参加者の皆さんからも次々と質問意見が出て、とても刺激的でした。

第2分科会「教育・文化」**参加者数（有料）25人****とことん議論！森のようちえんと木育**

かつての日本の多くの子どもたちは、「野山で遊ぶ」ことを通して自然の怖さや楽しさなど、生きていく上で大切なものを身につけてきました。また、自然素材に囲まれた暮らしの中で、木や森を大切にする心も育んできました。しかし、現代の暮らしは、森と切り離されています。

分科会では、子どもの頃から森や木にかかる取り組みである「森のようちえん」や「木育」を取り上げ、森や木を活用した教育活動の意義と、市民としてできることを考えます。

発表者**多田 千尋 さん ● 東京おもちゃ美術館 館長**

【東京おもちゃ美術館では、木育推進の一貫として「ウッドスタート」という取り組みを全国で展開している。「アウディ」や「無印良品」など企業や全国12の市町村に「ウッドスタート宣言」をしてもらい、誕生日品として地産地消の木のおもちゃの贈呈、キッズスペースの内装木質化・木育化、赤ちゃん木育ひろば・赤ちゃん木育寺子屋の開催、木育キャラバン、森のめぐみの子ども博など、様々なプログラムを展開。赤ちゃんからはじめる木のある暮らし、日本人の暮らし・木の文化を見つめ直し、森林や木に関心を持つ豊かな心を育むことを目指す。

野村 直子 さん ● 森のようちえん LittleTree 代表 横浜市認定家庭的保育室もあな☆ちいさな木園長、森のようちえん全国ネットワーク運営委員

自然の中で子育てをする保育・幼稚教育の考え方のひとつ、「森のようちえん」を広く知ってもらうため、「森のようちえん LittleTree」では、ワークショップや講演などを行っている。また、「家庭的保育室もあな☆ちいさな木」の園長としても、「森のようちえん」を実践中。「森のようちえん全国ネットワーク」は全国にある「森のようちえん」の実践団体や興味のある個人を緩やかに繋いでいる団体で、勉強や交流の機会を提供。著書に『ようこそ！森のようちえんへ』(共著) 解放出版社。

吉元 美穂 さん ● NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶ事務局長

モモンガくらぶは、北海道登別市ネイチャーセンターを拠点に、人と人、人と自然をつなげ、環境保全ならびに地域づくりを推進している団体。展開している主な事業は、ネイチャーセンターの管理・運営、外遊びを重視した子育て支援拠点の運営、エコツアーや人材育成の実施等。森の中から町の中まで様々な活動を行っている。

コーディネーター**井上 真理子 さん ● 独立行政法人森林総合研究所 多摩森林科学園 主任研究員**

森林教育をテーマにした研究を行っている。第1回「森林と市民を結ぶ全国の集い」に参加後、高等学校教諭（教科：農業、担当：林業）を経て、独立行政法人森林総合研究所 多摩森林科学園主任研究員。主な著書に、高等学校用教科書『森林経営』(共著)、『日本の森林と林業』他

分科会

第2分科会「教育・文化」

● 報告執筆

大槻 健太（千葉大学 法経学部法学科）

1. 事例報告

■ 多田 千尋さん

・赤ちゃんからはじめる生涯木育

私が目指したいものは「活樹」、つまり国産材活用の推進です。国産材の使用が増えることで、育樹や植樹などの川上部分にもより必要性が生まれ、好循環が生まれるからです。そして、国産材活用を増やすためには、生活の中に、暮らしの中に、木を取り入れることが必要です。私たちは、このことを「ウッドスタート」と呼んでいます。

暮らしに木を取り入れてもらうには、赤ちゃんに木の玩具を使ってもらうのが効果的です。というのも、若い親が子育てを開始する年に木のことを考えることで、その後も木を使ってもらえる可能性が広がってくるからです。たとえば、木の玩具を使った親は、やがては木の食器や木の机を使うでしょう、そこから木をふんだんに使った家を建てるようになることもあります。このようにして、将来を見据えることで、マーケットを広げていくことができます。また、市町村や企業が協働して、ウッドスタート宣言をし、木育の担い手になっていくことが期待されます。

■ 野村 直子さん

・森のようちえん 自然の中で育つ子どもたち

そもそも森のようちえんとは、何なのでしょうか。森のようちえんとは、自然体験活動を基軸にした子育て・保育、乳児・幼児期教育の総称です。そして、森のようちえんという言葉は輸入されてきましたが、実は里山保育など、日本には昔から「森のようちえん」と呼べるような保育がありました。

森のようちえんで大事なことは、大人の関わり方です。大人は一步引いて、子どもが主体となって

活動することが重要です。大人が主導で育ててしまうと、受身な子どもが育ってしまうからです。一方、子どもが主体的になるように育てることで、自分で考える子どもになります。森のようちえんでは、子どもが主体的になるように育てます。そして、「森のようちえん」というと、森でしかできないというように考えられがちですが、都心でもこの教育は実践できます。なぜなら、都心にある身近な自然と触れ合う感覚を与えることも大事なことだからです。

■ 吉元 美穂さん

・木育&森のようちえん

モモンガくらぶは、登別市の豊かな自然を活用して、環境保全活動と地域づくりを行う団体です。子どもたちには、たくさん遊んで本物に触れてもらい、大人にもモノづくりや体験機会を提供しています。

今回のテーマである「森のようちえん」や「木育」など伝えたいことを利用者の方などに伝えるためにも、伝える土壤をつくることに重きを置き運営を行っています。それは、事業への参加だけでなく、伝えたいことを個々に理解してもらう場をつくり、またそれを表現できる場を用意する、つまり伝える側にまわっていただくような取り組みを行っています。こうした活動から、人と人のつながりの重要性と自分自身のステップアップできる環境を生み出しています。

今の子どもたちが大人になるころの社会環境はどんな風になっているだろうか、将来を見越していくに何が足りないのか、地域の方々とアイデアを出し合いながら具現化する取り組みを行っています。

2. パネルディスカッション

・質問：森林と市民をつなぐという点で、教育の関係者にはどんなスキルが求められているでしょうか？

・野村さん：やっていて楽しいと思ってもらいたいですね。自然の中で子どもといふことが楽しいと思



ってもらえる人材がほしいです。

・**多田さん**：スペシャリストよりもゼネラリストが求められていますね。人との関わり力が必要です。また、妄想好きな人がいいとも思っています。

・**参加者**：今は本物をみんな排除しています。子どもたちの生きる力を養うためには、それではいけません。自然をつくれるという考え方がありますが、それも危険だと思います。子どもどうして本物の森に入る環境を作らなければいけません。そして、健常者が森を壊している！ということを忘れないでほしいです。

・**質問**：森のようちえんの構成要件は？

・**野村さん**：自然の中で活動していて、分割みのスケジュールでやるようなところは違うと思っています。自分で考えて、自分でアソびを作り出すことが、いちばんのポイントですね。

・**質問**：木育の構成要件は？

・**多田さん**：木育はもっと曖昧ですね。指導者によって違います。木育は、コンセプトなのかもしれないですね。木育から感じ取ることをやってもらえばいいのではないかと思います。

3. コーディネーターと発表者より

第1回の「森林と市民を結ぶ全国の集い」を東京で開催した18年前、そもそも森林教育という言葉はありませんでした。この間に森林と教育にかかる状況は変わってきています。この先も、こうした集いを開くときには教育のセッションがほしいですね。

将来への夢をお聞かせください。

・**吉元さん**：地域づくりに関する指導者の育成と雇用の場の確保をしていきたいと思います。

・**野村さん**：森のようちえんという選択肢が一般的になるような社会にしたいです。また、森のようちえんを中心とした地域づくりをしたいと思っています。

・**多田さん**：今日わきおこったテーマをきっちり学べるような「木育大学院大学」をつくりたいと思います。

4. 執筆者の感想

勉強不足のため、この分科会に参加するまでは、森のようちえんや木育についてあまり知らない状態でしたが、そんな私にとっても非常にわかりやすい議論でした。森や木のおもちゃの効用がより周知されれば、日本の森林資源の活用に繋がっていくように思いました。

第3分科会「食」

参加者数（有料）40人

「ジビエ・山菜入門」～美味しさを都市に届けて山村を元気に～

いま、ジビエが注目されています。その背景には、シカやイノシシによる農林被害のひろがりがあり、需要と供給とが上手くマッチしそうに思われます。また、山菜や天然きのこは、出回る時期が限られますが、季節を感じられる素晴らしい食材です。

しかし、こうした森林の恵みと現代消費社会の間には、解消しなければならないミッシング・リンクがあるようです。狩猟・収穫から加工処理・流通・マーケティング等に係るミッシング・リンクを明らかにし、山村を元気にしていく方途を探ってみましょう。

発表者

堀江 ひろ子 さん ● 料理研究家

宮崎県出身、日本女子大学家政学部食物学科卒。手近な材料で手早く作れる健康的な家庭料理や、電子レンジ等を使いこなす新しいメニューを研究開発し、料理研究家としてNHK「きょうの料理」「あさイチ」等に出演する。小学校中学校などで食育の講演多数。35年前よりボランティアで老人給食を指導。きのこの料理コンクール審査員、山菜文化研究会所属。著書に、『かんたんおせちとごちそうレシピ・リメイク料理・作り置きおかず』『食材別おいしい冷凍大百科』(共著)『おいしい煮物』ほか

松浦 友紀子 さん ● TWIN(女性のハンティングネットワーク) 代表

野生動物を「獲って食う」をテーマに活動する女性のハンティングネットワーク。北海道在住の女性狩猟者が中心となり2012年秋に設立。美味しいシカ肉のアピールや女性が楽しく狩猟できるような環境づくりを目指す。

渡辺 信子 さん ● 農業経営者

新潟県のJA北魚沼みのり館(直売所)に13年間勤務、地域の特産の山菜・きのこの流通に道筋をつけ、林産物の振興を図る。現在は農業に従事し、山菜採取、栽培、加工など、生産者としての活動を開始。

コーディネーター

石崎 英治 さん ● NPO法人伝統肉協会 理事長

日本で古来より食されてきた野生鳥獣肉を「伝統肉」と定義し、伝統肉を食べる文化の普及啓発による獣害問題解決を目的として「NPO法人伝統肉協会」を設立。増加する一方の獣害(農林業被害)に対し、狩猟者の育成から料理の提案まで包括的に取り組んでおり、“たべること”を起点とした自然と人間の共生を目指す。

● 報告執筆**松本 芳樹** (林野庁 林業・木材産業情報分析官)

1. 事例報告

■ 堀江 ひろ子さん

私は、山菜を食べる習慣がない温暖な宮崎県南部出身ですが、15年前に山菜文化研究会に入り、全国各地を回って山菜を採って食べる活動に参加するようになりました。それからしばらくして、4月にラジオ番組で山菜の話をし、「そんな時にそこで山ウドが出ているわけがない」とお叱りを受けた経験があります。東京での旬にあわせて前年の話をしたことが原因でしたが、山菜は正に時季もので、しかも地域によって旬の時季が異なるのだと痛感させられました。

東京でも注意しているとフキノトウやタラノメ等の山菜に出会えるものです。私も、毎年、こうした山菜をわずかですが家の庭で孫と一緒に採って楽しんでいます。私の孫たちはみんな山菜や干しシイタケが大好きです。小さいころから山菜の味を覚え、さらに山菜を採ったり料理する経験を積んでいく食育がとても大事なのではないかと考えています。

■ 渡辺 信子さん

東京では既に山菜が出回っていますが、豪雪地帯の魚沼市入広瀬地区では融雪後の5月～6月が旬の時季で大きなずれがあります。

また、採れる時には同じ山菜が山のように採れ、委託販売で引き受けても売れ残ってしまう反面、こういう山菜が欲しいと言われても時季がちょっとずれると集まらないので苦労します。

さらに、新潟ではアケビの新芽を珍重しますが、それを苦労して集めても東京では見向きもされないといった食文化の地域による違いもあります。

J Aの北魚沼「みのり館」では、有機農産物生産農家とのつながりで首都圏のデパートが当日出

荷の新鮮なものであればどんなに採れても山菜を引き受けてくれるようになり、塩漬け、乾燥等の加工品と併せ、山菜の安定的な販路を確保することができるようになりました。

■ 松浦 友紀子さん

私は、ジビエの肉を供給する狩猟者の立場から報告します。

エゾシカの場合、80kgのメス1頭から30kgの肉が採れると言われています。昨年度、北海道で捕獲されたエゾシカは14万4千頭ですから、1頭当たり30kgとすると4320トンのシカ肉に相当することになります。しかし、このうち流通した個体は14%しかなく、残りは少し自家消費され、後は廃棄されてしまいます。そして、流通されるものは処理場できちんと衛生的に処理されるのですが、自家消費される場合には衛生管理がしっかりしていない場合もあるので、その改善が課題となっています。

なお、エゾシカによる農産物被害等が深刻な北海道では、エゾシカ肉の認証制度を創ったり、毎月第4火曜日を「シカの日」と定めて協力する料理店でシカ肉のメニューを提供する運動を展開したり、いろいろな取り組みをしています。

私は、TWINという女性のネットワークを起ち上げて、狩猟者達のイメージ・アップを図るとともに、子ども世代にシカ肉を食べることを教えて次世代を育成していくことに取り組んでいます。エゾシカを管理していくことや食べていくことに関しては、年輩者には多くを期待できないので、特に若い世代に期待しています。

■ コーディネーター 石崎 英治さん

シカ肉の卸しのほか、エゾシカフェという店もやっていますので、流通の立場やシェフの立場で商売として流通に乗せる観点から報告します。

北海道では、「シカの被害を減らすにはみんなでシカ肉を食べれば・・・」とよく言われますが、流通を考えるに当たっては、先程、お話のあった4320

分科会

第3分科会「食」



トンという数字はとても小さな数字であり、牛肉の代わりに食べたらアッと言う間にエゾシカを食べ尽くしてしまうことを認識しておくことが必要です。

また、一般的に食べ物を流通に乗せるためには、価格が安ければ良いわけではなく、高くても価格が安定していることに加え、サイズも安定していて、味、それに必要な量が確保できるなど諸々の意味での安定供給が求められます。しかし、こうした安定供給が難しいジビエの場合、消費するシェフの側はシカ肉は安定供給が難しいことを理解し、供給する山側はトレーサビリティ確立の工夫をするなど、お互い歩み寄っていくことが大事だと思います。

2. パネルディスカッション

山菜、ジビエそれぞれについて、地産地消を進める上での課題、ビジネスを成立させるための山側の課題及び都市側の課題について話し合いました。

まず、地産地消を進めるための課題ですが、山菜については、若い世代、特に働いているお母

さんに塩漬けや乾物を戻したり下ごしらえに手間がかかる地域の食習慣をどう継承していくのかが、ジビエについては、ここ百年間で失ってしまったシカ肉を食べる習慣をどうやって再生させていくのかが課題とのことでした。北海道では、年輩者はシカ肉をあまり食べませんが、学校の給食や自衛隊の食事に美味しいシカ肉が出されるようになり、若い世代は食べるようになってきているようです。

次に、ビジネスとして成立させるための課題ですが、ゼンマイ等の山菜については、家に帰って手揉みで乾燥しなくともゼンマイを探ってくるだけで1日1～2万円になるような工夫をすることや、都会の人達は山村に行って山菜が出てくるとご馳走だと思うのに、山村の人達は肉や魚がないとご馳走だと思わない等の食い違いを埋めていくことが大事であるという話がありました。

ジビエについては、山側の課題として、ハンターの育成や自家消費における衛生管理のほか、車載の移動式処理場など処理場の技術革新を行い、エゾシカをもう少し効率的に利用できるようにすること、都市側の課題として、シカ肉はある程度値段が

する肉だという認識を持ち、シカらしい味のする失敗の少ないレシピを開発して美味しいシカ肉を食べてもらうことが重要であるという話になりました。

参加者からは、ニホンジカ肉の可能性について意見が出され、個体の大きさが小さいニホンジカは、狩猟の仕方も違うのでコスト的にエゾシカよりかかり増しになることが課題であると石崎さんから説明がありました。

その他、民宿が行っている山菜採りツアー、都内の居酒屋や滋賀県内のカレー・チェーン店でシカ肉を食べることができることなど参加者は山菜やジビエに関する情報に精通しており、ゼンマイ採りへの学生アルバイトの活用、ハンターへの衛生的解体方法の研修実施など種々の提案もありました。

3. 執筆者の感想

全体をまとめると、生産者も消費者も手間がかかり、安定的な供給が難しい山菜・ジビエの場合、美味しさと不便さとの折り合いをつけていくことが重要ですが、やはり「食」であるからには美味しいものを食べる経験が一番大事であることが強調されました。

また、山菜もジビエも巨大市場には発展しないので、限られた小さな市場の中でビジネスを成立させなければならないということが印象的でした。

今回の「食」分科会は、消費する人と供給する人の間をつなぐところに注目しましたが、食を考える上で抜きがたい大事な話であり、話の中身も興味深いものでした。

第4分科会「エネルギー」

参加者数（有料）44人

日本が誇るクリーンエネルギーとしての「森林資源」

いま、エネルギー問題は世界的に取り組んでいく大きなテーマです。日本においては、東日本大震災をきっかけに、我々の生活と切っても切れない身近な問題としてさらに認知されるようになりました。分科会では、古来より使われてきた身近にある自然エネルギー「森林資源」の、熱利用や発電などの現代的な活用事例や今後の展望から、この問題への市民の関わり方を見い出し、日本の森林資源の豊かな価値を見直したいと思います。

発表者

大場 龍夫 さん ● 株式会社森のエネルギー研究所 代表取締役

木質エネルギー、水力、太陽光、風力機器の設計・製作・設置工事、プランニングなど、ソフト・ハードの双方共に一貫して自然エネルギーの導入実践にこだわる。2001年10月日本初の森林バイオマス専門推進機関「(株)森のエネルギー研究所」を設立。森林バイオマス活用によるベストシステム構築のため、さまざまな地域で地元密着のコンサルティング活動を続けている。森林資源の多様な価値を引き出すため、森林資源活用の物販会社「株式会社 森のいいこと」を2007年に設立。

小出 仁志 さん ● NPO 法人ナチュラルリングトラスト 副代表

1989年、(財)せたがやトラスト協会設立時に職員となり、都市部の緑地保全を推進。2012年1月、都市と農山村のつながりの再生を図るナチュラルリングトラスト(東京)を設立。森林保全活動として「薪」を通し、自然エネルギー利用の啓発と、都市と農山村の交流による地域の活性化を進めるプロジェクト「薪まきネット・薪バンク」を進めている。

佐藤 靖也 さん ● 一般社団法人木質ペレット推進協議会 事務局長

2008年、「日本の森を育てる社会の仕掛づくり」をスローガンに立ち上がった「合同会社木質ペレット推進協議会(WPPC)」(新潟市)の、発起人の一人。2013年夏、社会事業を行う部門を販売部門から切り離し、一般社団法人化してからは、理事・事務局長を務める。

コーディネーター

三浦 秀一 さん ● 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科准教授

兵庫県西宮市生まれ、現在山形市在住。自然エネルギーの活用や省エネ、地球温暖化対策の技術評価や政策に関する研究を行う。日本の有力な再生可能エネルギー・森林資源に着目し、新たなエネルギー生産地として、中山間地域の再生ビジョンを提示。著書に『コミュニティ・エネルギー、シリーズ地域の再生』『木質資源活用 森林の恵みを活かす～木質バイオマスで中山間地を元気にする～』『未来の住宅 カーボンニュートラルハウスの教科書』など。

● 報告執筆

李 明燁／イミヨンファ

(一般社団法人 more trees)

1. 事例報告

■ 大場 龍夫さん

弊社のミッションは、「森林資源の多様な性質を最大限に生かすこと、人が森に感謝し、人と森のつながりの再生、地域を活性化、地球温暖化を防止、豊かな持続可能社会への転換に貢献」です。その為には、森の木を効率よく供給し、エネルギー利用することがポイントです。

木質バイオマスには、薪や炭、チップやペレットとして使用するなどの方法がありますが、どう使用するか大きく分けると、「燃やす」「ガス化」「バイオエタノール」があり、その中でも「燃やす」が投資効果が高く最適です。

導入事例としては、飲料製造工場で、殺菌に使用する給湯に使っています。隣接する製材工場の木くずを購入し燃やすことで、重油代を削減し、製材工場ではいらない木くずが収入源となりました。両者にメリットがある事例です。

また、クリーニング工場では、洗濯をする際に使用するお湯や乾燥する為に、大量の重油を使用していましたが、チップボイラーを導入し、重油代の削減に成功しています。

地域でエネルギーを有効に利用すること、例えば温水の温度の高い物をウナギの養殖に使用し、温度の低い物をハウス栽培に使用するなど、カスクード利用していくことがポイントになります。森の恵みを活かし、エネルギーとして利用することで、地域と人を元気にすることが出来ると考えています。

■ 小出 仁志さん

ナチュラルリングトラストは、都会で薪の利用拡

大をして行こうと言う、どちらかというと啓発的な活動をしています。

活動の目的は、「自然を守る大切さを伝え、環境保全を行う人を育て、地域の自然や歴史調べ、守り方を考え、交流により地域づくりを進め、活動、仲間を増やすこと」です。

活動の一つとして、「薪バンク」を初めて2年目になります。

放置された森でクヌギやナラが大径化した為、ナラ枯れが深刻化していますが、都市に薪のある暮らしが広がれば、山が元気になると思い、古くて新しいエネルギー薪を見直してはどうかと「薪バンク」を始めました。

薪が手に入りにくい都市の薪ストーブユーザーと生産者を結ぶシステムです。薪の売価の7割を生産者へ還元することで生産意欲を高め、地域の高齢者の雇用を創出し、交流により地域の活性化も図っています。

薪を売るだけではなく、笹やぶ化した雑木林の再生や、伐採活動を実施しています。ユーザーが活動に参加することで付与されるポイントは、薪かお米の交換に使用できます。

日常に寄り添った薪を介し、森と人の繋がりを日常で感じられる活動になっています。

■ 佐藤 靖也さん

日本の森を育てる社会の仕掛けづくりがWPPCの役割です。

製材所から出る木くずなどの未利用木質資源でペレットを製造し、供給体制を整え、流通させることを実施しています。ペレットを利用することにより削減されたCO₂からオフセットクレジットも創出しています。

ペレットは、都市部に隣接した地域で製造し、地域で出る原料で地域で使用する量を貯う、地域内循環を目指しています。

新潟市秋葉区には、かつて日本一の石油産出量を誇った里山があり、石油で栄えた地です。石油

分科会

第4分科会「エネルギー」



がなくなり、人が入らず荒れた里山の間伐を始めましたが、木材として使用しきれない物をペレット化し、石油の里から木質エネルギーの里へ山ごと代替えするプロジェクトが始まりました。

秋葉区の基幹産業は、花卉園芸ですが、ハウスの加温には多くのペレットが使用されています。ペレットを使用し加温した花卉を環境負荷が低い商品としてブランディングし、東京などで販売することで、農家がペレットを使用するメリットも創出しました。

その地に適した森林エネルギーの地産地消を進めていき、地域の資金を流失させないことが、地域を守ることになります。小規模からでも、ない物ねだりではなく、あるもの探しをすることが大切です。

2. コーディネーター

■三浦秀一さん

森林と市民を結ぶ集いですが、森林とエネルギーを結ぶという点において、違った物をどう結んでいいけるのか? 「結ぶ」が大きなテーマです。3.11以降の社会や地域の在り方、ライフスタイルの見直し

があり、そこに森林、エネルギーへの関わり方をどう考えるかをポイントにディスカッションできればと思います。

かつて里山は燃料の為の山でした。戦後、石油の普及により、里山はエネルギー源としての価値がなくなり、木をエネルギーとして燃やすことが後ろめたいことになりました。

日本の森林率は、先進国の中でフィンランド、スウェーデンに次ぎ第3位です。一方、人口百万人当たりの薪の生産量は、日本は、1位のフィンランドの1/1000で、アメリカの1/150、韓国の1/50で、森が沢山あるのに、薪を使わない国は世界中を探しても日本ぐらいしかありません。

ヨーロッパで再生可能エネルギー比率1位のスウェーデンは、再生可能エネルギー利用比率48%、森林面積率74%、人口930万人。東北地方は、人口970万人、森林面積率70%、ヨーロッパで実施されていることが実践できる要素を持っています。

山形県最上町は、人口1万人、森林面積率80%、森林面積280km²、森林の年間成長量は灯油約2万kl分、成長率の半分で家庭の灯油6000世帯分が自給可能で、3000世帯の最上町は、エネルギー

の自給が可能です。

最上町の家庭で使用される灯油代 年間3億円の内、手数料として町に残る3000万円以外の2億7000万円は町外へ流出していることになります。

灯油から薪・チップなどの森林エネルギーに転換出来れば、年間3億円が町内に留まることになり、地域社会で自給的なシステムの構築を同時に考えることが大切です。

3. 質疑応答

① 国内全体のペレットの生産状況は？

・大場さん：ペレット工場は100超あり、小さい地産地消型、大規模型の2極化しています。年間約10万トン製造されています。使途は、ボイラー利用8割以上、ストーブ利用2割弱です。

② 森林資源 薪、ペレットでエネルギーの自給自足をするなら何が良いか？

・三浦さん：ペレットの製造は個人では難しいので、自給自足なら薪を利用する方が良いと思います。

③ どの程度の規模でバイオマス利用に取り組むのが良いのか？

・大場さん：何に利用するのか、発電なのか、熱なのかや、経済圏、集材エリアで変わります。たとえば、バイオマス発電は、最低5000kw、出来れば1万kw位じゃないとペイできません。5000kwで、年間重さで6万t、10万m³（10t トラック 20台分）位の材が必要です。どこででもできる話じゃありません。木材の集積範囲は、50~100km、トラックで行って帰れる位が多い。昔は流域が経済圏／集材範囲でしたが、最終的には、河川流域が目安になるのではと思っています。また、熱利用もセットで採算をとることを目指すべきです。

・三浦さん：規模の目安に、木材の量があります。山形県はそんなに林業が盛んではありませんが、年間35万m³の木を伐採しています。10万m³のバ

イマス発電所が3か所できれば年間の伐採量と同じ位の量に達してしまいます。資源がなくなる可能性も持っています。

●まとめ

・三浦さん：山側ではバイオマス発電が注目されていますが、山側から見てバイオマス発電が良く見える理由は、森と市民が繋がっていないからです。

薪やチップで購入してもらう方が金銭的に効率的なのに、大量に一括購入してくれるバイオマス発電に魅力を感じています。農協に米を売るのと同じ仕組みで、売る相手を探さなくて良いからです。エネルギーの需要量を考えると、バイオマス発電は、発電効率が悪く、資源の枯渇の可能性も持っています。だから、地域での仕組みとネットワークづくりを大切にし、薪やペレットを使用するのが良いのです。

家庭と産業の効率をどちらも考えていく必要があります。

今日紹介があったような、ペレットや薪使用などの利用事例が全国に知られれば、バイオマス利用が広まります。

4. 執筆者の感想

日本には未利用の木質資源がたくさんありますが、家庭用の薪、ペレット、工業用のチップや木くずなど、その活用方法を様々な立場の方から聞くことができた貴重な経験になりました。

日本各地で木質バイオマス発電所建設の計画がありますが、スケールメリットを追求しすぎると、あっという間に禿山になってしまう可能性があることが良くわかり、一般家庭や地域内で小さく利用していくことの大切さを感じました。

やはり個々人の意識や選択の重要さを感じ、改めて日本の森が置かれている現状を多くの方に知っていただきたいと思いました。

第5分科会「女子会」

参加者数（有料）33人

「森×女子」の「つながる力」をさぐる

「森ガール」の流行にはじまり、「林業女子」や「狩りガール」たちが注目を集めています。いま、「森×女子」の何が注目され、期待されているのでしょうか。この分科会は、森の「女子会」を開きます。女性ならではの感性や生活視点から、日本の美しい森を持続的に守り・活用するために、「女子力」の可能性、その「つながる力」を探ります。きっと新しい出会いがあります。

発表者

加賀谷 廣代 さん ● コクヨファニチャー株式会社 環境事業 TCM タスク

東京生まれ 東京藝術大学美術学部工芸科卒業 同大学院工芸科鑄金専攻修了 東京大学大学院農学生命科学研究科 森林科学専攻修了 1998年よりコクヨ（現・コクヨファニチャー株）在籍 全国各地の国産材・間伐材の家具企画製造・森林資源活用提案・地域活性化等に従事 NPO 法人やま・もり再生ネット 副理事。

林業女子会@東京

林業女子会@東京は、全国に9つある林業女子会の東京版。首都圏の森林・林業に興味のある女性が集まり、フィールドでの森づくり（森林整備）を中心に活動中。また、都内で開く定例会や、SNSでの情報発信などを通して、東京に暮らす多くの人にとって、もっと森や木を身近になることを目指している。

鈴木 海花 さん ● フォト・エッセイスト（都合により当日欠席）

雑誌、単行本などで、紀行や自然（主に虫）をテーマの記事を執筆。また数年来『虫愛づる一日』『虫力フェ』などのイベントを通じ、女性虫愛好家間のコミュニケーションや女性ならではの視点の虫観察の楽しさなどを伝える活動をしている。著書に『虫目で歩けば』『虫目のススメ』『チェコ AtoZ』『よりみちチェコ』など。

コーディネーター

赤池 圜 さん ● 私の森.jp 編集長

私の森.jpは、「初心者にもわかりやすく、役に立つ」森情報のポータルサイトを目指し、国産材の製品紹介から、日本の森の歴史や文化、クイズに仕立てた統計データ、インタビューなど、多様な編集切り口でコンテンツを提供している、ウェブサイトの編集活動。都市部に住もう生活者が、森に想いを馳せるきっかけになれば、と編集やデザインを職業とするメンバーが集まりプロボノ運営をしている。

● 報告執筆**杉山 沙織** (林業女子会@東京)

分科会女子会の目指すところは、「森×女子」の「つながる力」をさぐる というもので、参加対象者は「森林や林業に興味がありなんらかのアクションを起こしたい人、すでに起こしている女性」と設定されていました。

さて、今、「森×女子」の何が注目され、期待されているのでしょうか。「女子力」の可能性、その「つながる力」を探るべく、分科会は進行しました。

1. 事例報告

■ 林業女子会@東京

メンバーの竹内さん、堤さん、近藤さん、木俣さん、斎藤さんより、5つのプロジェクトごとに紹介形式で発表が行われました。

1) 森づくり活動は都内から電車で1時間程の市原市で、ボランティア団体に協力を頂き、長期的な森林施業・レクリエーション活動を行っているそうです。活動で大切にしているのは安全面で、初めてでも安全作業できるように、レクチャーやヒヤリハットの共有を行っているそうです。また、いろんな人と知り合って仲間になることを満喫する企画として、森で○○するお楽しみ活動を入れることがあるそうです。他に、各地の森の現場を巡る2) もりめぐり活動。森林、林業、木、自然×子供、であれば何でも活動になる3) KIDS& BABY 部があります。女子会は、気軽な出会いとして都内いろいろな所に集まって、打ち合わせや食事会を行っているとのことでした。女子会への参加による before after として、林業に興味を持っている人に出会えなかった中で、沢山の人たちと出会えた(堤さん)、和気あいあいと交流ができて楽しい(近藤さん)、目を輝かせる女性たちに刺激を受ける(斎藤さん)といった声が寄せられました。

■ 鈴木海花さん

鈴木さんは体調不良による欠席のため、コーディネーターの赤池さんより発表頂きました。タイトルは「虫目で歩こう!」

テーマは虫好き女性が増えている!ということと、虫好き女子とつながっていくためにはどうしたらいいかということです。その背景として、(1)高性能デジタルカメラの普及したことでの虫が撮影可能になったことや(2)SNSを通じた情報の共有によって虫愛好家のネットワークが形成されました。それら虫好き女子とのつながりを生かすためには、発信すること、日々の虫の観察をすること、観察ブログ単行本の出版の企画をすることが重要です。実際に人が会う場所として「虫カフェ」があります。虫カフェは好きなことを思いっきり好き!って言うことができる場所。そこでは、高価でなくとも、食事内容にこだわったり、グッズの物販をしたり、場所・立地にこだわったりなどの工夫が生きていています。そんな中で気をつけるべきこととして、グッズの品質やセンスがバザーレベルに見えないようにしなくてはならない、というルールがあります。それは、せっかく仲間が集まてもそれを仲間にから外に広げるのが難しくなってしまわないようにという工夫であり、すばらしいと信じること、好きなことを発信する一工夫です。

「ゆっくり歩くこと」。そんな日々を通して、自分が楽しんでいることを、次の世代に最も身近に伝えられることを目指そう。

■ 加賀谷廣代さん

加賀谷廣代さんからは「先入観を捨てる」というテーマで、KOKUYO でどのような仕事をしているかについて、及び森林と女子力について普段感じていることについてお話を頂きました。

加賀谷さんは森林・林業と出会ってから16年。KOKUYO の創業は森林資源でもある紙から始まっており、その会社の事業でエコプロジェクトに参加することが林業と関わりをもつきっかけでし

分科会

第5分科会「女子会」



た。以降、プロジェクトごとにテーマを設けながら、仕事の中で様々な事例を手がけてらっしゃいます。仕事を通じたつながりの中で、森ごと出会いを生んでおり、1)「森から川下の流れを提案する」というテーマで、オブジェとして技術開発を行った秋葉原ワシントンホテル。2)「地元の木を使う」というテーマで、長崎の学校への導入した事例があります。このように仕事を通して森林・林業に関わること、更にクオリティを高めてストーリーの見える化をし、ビジネスに寄与することが重要です。実際に女子力を投下すべきところは「イノベーション」分野であり、現状の評価軸には入っていない実験的なことを行う主体になることを期待しています。

2. グループワーク 参加者の声

コーディネーター・赤池円さん(私の森 jp)による企画として【「森×女子」のつながる力を探る】ために、「ヒトを森に行くその気にさせたい」「間伐材で面白いモノ・コトを作りたい」「身の回りのモノで木製に置き換えられるモノを探したい」「森の恵みを美味しく食べたい」といったテーマを設けて

行われました。各テーマについてグループワークを通して、各自の考えを出し合い意見を共有しました。全部で8班に分かれたところ、事例を持っている参加者が具体的な話題提供をし、そこからどんどん話が膨れ上がっていく形で女子トークが盛り上りました。最後に各班から全体発表で共有をいただいた所、「地域の名産物や文化を詰め込んだ間伐材パック」「森を食べる美肌ツアー」などといった、女性の一般的なセンスが光る企画案が多く出ました。

参加者の声として、同一テーマに関する3つの発表について、それぞれのチームをA、B、Cとして下記に紹介します。テーマは「ヒトを森に行くその気にさせたい」。

チームAは現状の問題は「一般の人に森のイメージが湧かないこと」「一度森に行ったとしても定着しにくいこと」「人をうまく巻き込めていないこと」などが挙げられました。A班には山林を所有している方がグループワークの中にいらしたことによって、具体的な事業の話にも触れられていました。事業は「フォレストアドベンチャー」という森のアスレチック・テーマパーク化する取り組みと、

「山林見学・視察」を林業業界向けと一般向けの2層に提供する取り組みの2つが取り上げられました。いずれの事業も人から人への口コミが鍵であり、だからこそ①サービス精神、②道路の整備を通じた満足度の向上が最も重要だという話でした。チームBは現状の問題を「森について知らないこと」と設定しました。そこで、イベントを実施すること、更に一般的な知識のレベル別に、子どもから大人まで想定してプログラムを組む中で接点を作っていくという話が出ました。チームCでは現状の問題を「発信の方法」に設定しました。何らかの情報媒体に載せたから集まるという訳ではなく、どんなすてきなことも伝え方次第。①直接伝えることの大切さ、②引き寄せるコンテンツとして、ターゲット別の目玉を作ることを中心に、「森の原点を伝

えるコンテンツの充実」を図ろうという話でした。

3. 執筆者の感想

女子会分科会において、報告事例と参加型のグループワークを通じて、関係者含めてその場にいた人が思いを口に出すことができていたということ。中でもいわゆる“女子会”的な、前進しているかどうかではない時間をもち、各自が思い思いに話をしていたということ。そのような場当たり的に楽しみ合う中で、次の一步を踏むきっかけとして作用するかどうかは、今回各自に任せています。まず知り合うことから何事も始まりますし、知り合う中でふと思い出される楽しい時間が「市民と森」をつなぐきっかけになれば何よりに思います。

交流会



全体会

分科会報告



高木 健郎さん（第1分科会）



大槻 健太さん（第2分科会）



富井 久義さん（第3分科会）



本多 俊貴さん（第4分科会）



杉山 沙織さん（第5分科会）

あいさつ



本郷 浩二さん（林野庁 森林整備部長）



梶谷 辰哉さん（国土緑化推進機構 専務理事）